

ずいそう

「大学ゴルフ部」の言い訳



角谷嘉泰

ゴルフを始めたのは大学に入って間もなくでしたので、もう39年も前のこと。中学・高校の同級生のY君がたまたま同じ大学に入学していて、新学期早々、大学の学食にいたところに近寄ってきました。「角谷、もうクラブかサークル決めたん?」「まだなんよ。テニスカスキー、そうウインドサーフィンなんかもやってみたいなあ。女の子也多そうやし…」「そんなんもうありきたりやし、上手いやついっぱい居るで。これからはゴルフの時代やで!絶対モテると思うねん。」との会話。なんのことはない松山の男子校育ちの2人は妄想に駆られて体育会系のゴルフ部に入部することになったのでした。

当時は、昭和58年2月に米ゴルフツアー「ハワイアンオープン」最終日の18番ホールで第3打をカップインさせて逆転優勝した青木功らによる、いわゆるAON(青木功、尾崎将司、中嶋常幸)時代と呼ばれ、日本中でゴルフ熱が沸騰していたのをよく覚えています。

その所為か、私たちの学年は部員が多く例年の倍以上の人数(確か16名)が在籍していました。ただ、早く上手になりたい気持ちとは裏腹に、放課後の部活練習は体力づくりがメインで、嫌いなランニング、坂道ダッシュ、腕立て、腹筋、アイアンの素振りばかり…。そろそろ実際に球を打って先輩にレッスンを付けてもらえるのかな?と期待していたところ、「おまえたち、しっかり練習してこいよ!」と、近くのゴルフレンジにほぼ放置。どスライスが治るはずがありません。

それでも初ラウンドのスコアは120を切ったと記憶しています。初めての合宿でもハーフの平均が約55と、同期の中では“中の中”ぐらいで、センスはあるのかなと希望を抱いてスタートした大学時代でした。

大学対抗戦のメインは関西学生ゴルフ連盟のリーグ戦で各校5名が出場し、上位4名の合計スコアで競うものだったと思います。男子は4部までありますが、我が神戸大学は4部が定位置だったと記憶していますので、昨年度のリーグ順位表を見てブービーであることに対しあまり違和感はありません。ちなみに華の1部は、大阪学院、同志社、関学、近大ら強豪ぞろいで

昔から変わっていないと思います。皆さん、「大学ゴルフ部」と聞くと、彼らを想像されるのだと思いますが、そんなエリートは一握りしかいないことを言い訳がましく申し添えます。大学ごとでレベルも異なりますし、大学の中でもピンからキリまで居りますので、悪しからず。

同期で試合に出られるのは2~3名、残りは皆補欠です。どの学年にもゴルフ経験があって入った時から上手いやつが一人か二人は居ますので、レギュラーはすぐに固定されます。私たちのようなダボベース前後でしか廻れない連中はずっと補欠のままなのです。思い起こせば学生時代に100を切った記憶はあまりありませんので、そう、今の方が断然上手いのです。

冒頭のY君は、運動神経が良く準レギュラーまで行ったのですが、結局試合には一度も出られませんでした。モチベーションが上がらない部活にほとんど嫌気が差し、まして彼女なんてできっこないと気付いたY君と私は、別のお遊びサークルを立ち上げることに熱中し、専門課程に上がってからは、ほぼ幽霊部員状態になっていました。

社会人になってからゴルフを嗜むようになりましたが、熱心に取り組む時期もあれば、釣りに嵌って4~5年釣り竿しか握らなくなった時期もありました。悲しいかな、クラブを握らない期間が長いと、スコアは



写真1 神戸大学ゴルフ部建築OB会@太平洋クラブ御殿場コース
(筆者は向かって左端)

昔に戻ってしまいます。そんな折に会社の連中と廻ると、「素振りシングル」だの「ゴルフ部補欠」だの…、散々野次られる始末。大阪大学美術部出身の元専務には「美術部に勝てないゴルフ部」などと今でも茶化されます。要は運動神経の問題なのではないでしょうか。「ゴルフ絶対感覚」を磨け、などという本も読みましたが、すぐに忘れてしまいます。私の場合、運動神経が不足する分、次のラウンドまでの期間を極力空けないようにすることが肝要と思ひ至り、現状を維持する乃至少しでも上達するために、昨年からは最低でも月2回以上

のペースでラウンドをこなすよう心掛けるようにしました。たまたま会社の後輩に誘われたこともあって、昨年の春に憧れのゴルフ会員権を取得しました。そのような効果もあってか、昨年7月のJCMA 四国支部ゴルフ同好会（第348回）例会においてOBなしで優勝することができたことは本当に嬉しく、感無量でした。いずれは「さすがゴルフ部」と言われる日が来ることを夢見てさらに精進して参ります。

—かどたに よしひろ（株奥村組 四国支店長）—

